

■染色、織り色、編み色、重ね色、テキスタイル色彩学のすすめ

色彩学の配色理論では、テキスタイルの配色に対して、手も足も出ない。ハッキリ云って役に立たない。どの教本をみても、どの学校でも、色彩学と色彩大系の説明をくどくどと載せ、解説している。具合の悪いのは、それが実際に役立つような誤解を生んでいることだ。マンセルシステムやXYZの表色系がどれ程役立つというのだろうか。むしろ色材混合系色票の方が実際的である。なんとすれば、これがこの業界で多用されているからだ。有効にして有用なのである。ところがこれをまともに取り上げていない。並置加法混色の事例に、シャムブレ効果やメランジ・ヤーン効果をあげるなどがまかり通っている。こうした状態に疑念が生じず、持続していることは、テキスタイルデザイン教育にとって色彩は技術となっていないことの証しだろう。それにしても、実際的でないことを改めないのは、実際に無知なのか、怠慢と云ってよいだろう。このような教育下から無駄が生まれていることに注意を払うべきだ。「〇〇教授が教わったことが、適用しない」といった悩みや、迷ったあげくの相談を数多く受ける。2つの学校で「配色実務技術コース」「配色術」を設けているのは、こうした迷いから学卒新人を救うためである。テキスタイルは、印刷紙面や塗装面のように平らではない。丸い断面をもった糸で布地は成り立っている。織目がある。表面効果がある。毛羽があったりする。目透きであったり、繊維自体が透明であったりもする。材質感も持っている。だから、印刷したり、塗装した、まっ平らな色票の色（ソリッド・カラー）とは、異なっている。

布面に凹凸があるから陰影を生じ、化合織、羊毛であれば、当たった光を透過させ、表面色と透過色を生む。毛羽があれば光を吸い、先端で光る。繊維や糸の間で色は反射しあう。布地、糸は、二重織りや編みによって重ね色を生む。毛羽は布地の面にはりついているばかりではなく、空気中に在る。布地は物質が平らに延された物でなく、空気を質量を多く含むものである。だから、ソリッドカラーでテキスタイルの色彩を語るべきではない。

交織、交換、混紡、染分けによって得る混色の効果にいたっては、色彩学の配色理論は適用に耐えない。

配色は柄（模様）があって、それにする。柄には意味があったり、色面の広さや散開、形やその繰返し、位置などがある。そこで、同形の同寸法の四辺形の色彩を並べて、調和するとか、しないとかがやってみたり、美度計算するなどに時間を費やすことは、程々にするがよい。大事なことは、実際の柄をどのように読むかである。配色はそこから始めるものなのだ。

抽象化された色彩など、デザインの現場には存在しない。テキスタイル・デザインにとって、数値で表わしきれような色彩に興味は無い。色材と染色方法と材質、繊維技法などの色彩に関心があるのであって、これに入り込むことができないような抽象化された色彩学など、テキスタイル・デザインにとって百害あって一利しかない。デザインは抽象の理論ではなく、具現の技術・技能である。テキスタイル・デザインは実際上で、事実で、語る事が筋である。

■C.Gも結構ですが、

テキスタイル・ビジネスにおけるデザインの現場では、C.Gは不可欠な存在である。C.Gのディスプレイ上やペーパーアウトした紙面には、実物とみまごうように表わす。それだけを眺めていればそうであるのだが、実物にしたら異なる。C.Gにはテクスチャーが無い。染め色や織り色でなくRGBの色である。光による幻影である。新しいタイプの図案づくりや配色色替えといったことが出来る程度だ。テキスタイルがそれ程単純なものでないことは、少し落着いて考えれば納得できるはずだ。コンピューター好きで、すぐ扱になれる近頃の若者にとっては、C.Gを操作する方が、実物の繊維、糸、布、実際の染織編するよりも取っつきやすい。コンピューターでシュミレーションをいくらやっても、テキスタイル・デザインをやったことにはならない。実物に触れ、実際を経験した上で、C.Gを用いるとき、C.Gはパワーを発揮する。テキスタイル・デザインの教育においては、始めに実物と実際があるべ

きなのだ。若者に迎合しての人気とりや人集めの道具と割り切って用いているならまだしも、C.Gの弊害を充分把握した上でないと危険である。新人がC.Gを利用することによって起こるマイナスの諸点が、筆者などマネジメントする者の間で話題になる。

C.Gのデザインシステムを描える以前に実物の糸、布地を、生地幅で1m長、400種を10組、揃えた教育プログラムの設計をすべきだ。

■模様で惹きつけたってよいはずだ

装飾（デコレーション）を蔑視するバウハウス流デザイン観のデザイン教育の学校ばかりでよいわけがない。装飾の復権を目指す学校もあってよい。デザインという思想は、その出生が装飾の否定にあったのだから、デザイン教育に装飾を、という方が無理なのかもしれないが。

装飾も市民は好きである。これを低俗と決めつけて、締め出し、賤民や日陰者扱いしているのもどうかと思う。このへんで、戦後50年間君臨したデザインの功罪を、冷静に見つめるべきだ。

装飾が今日、これ程までに低質になったのはデザインによるところが大である。デザインは良民で、デコレーションは根絶すべき存在として、民族浄化もどきをしてきたからだ。「客が求めるから、売れるから、仕方なく装飾をつけてやる」といった状態が永く続き、装飾のもつ意味や豊饒さには一考もなされなかった。学校に装飾を教授する者もいなかった。

装飾の予定は模様の否定である。それは描写力の軽視を生んで、描く腕をもつ者を激減させた。描き表わす力のも失は表現の豊さを失わせた。

描き表わす力を身につけるには、長い年月の修練を必要とする。これを無用とする「デザイン」の思想は、忍耐を嫌う者には都合がよい。だから今日、模様は、過去の模様のコピーの貼合わせで制作される。図案家というよりもレイアウトマンである。描く力を大事とし、それを与え続けている国のデザイナーに負けるのは当然なことなのだ。テキスタイル図案もまた植民地となってしまった日本。デコレーションとデザインとが同等で共存する状態が豊かさを生む。ニューヨークやパリなど欧米をみるまでもない。筆者は装飾学校を設けたいと思っている。栗辻博氏は「サーフェイス・デザインと名付けたら、君、やれよ」と亡くなる前におっしゃった。

■それをおっしゃるのか、か。

テキスタイル・デザイン教育のり・デザインが必要だ、と思いませんか。創造性が必要なのは、デザイン学生である前に、教育にたずさわる者だ。今日のテキスタイル・デザイン教育の状態をつくりだしたのは、教育者の次のような姿勢にあったと思う。

- ①職務上の怠慢
- ②創造、あるいは創造性の欠け
- ③実際の無視、あるいは軽視、または逃避
- ④テキスタイル造形、手工芸好み

これらは教育者の資質に関わっている。企業やデザインの現場が産学協働を拒んできたのではなく、現場から逃亡した者や現場で評価を得られなかった者などが教育者の席を占めたからだ、と思う。そうした者は現場から、実際から離れる方が安全なのだから。

それとも、お客様である学生が、実際のデザイン教育をお望みでないのかもしれない。としたら、筆者は大変な失礼をしたことになる。大学の場合は、文部省が足かせのような妨げとなっているかもしれないが、専門学校の場合は、その気さえあればできるはずだ。

■テキスタイルのデザイン&デコレーション・スクールを創設したい

一つのイズムを明確にした技術、技能学校である。こうした学校の創設と設計、運営を可能にする協会を有志と共に設けたい。これは明確な目的効果をもった活動体で、同業者の仲良しクラブではない。

●筆者の ぐえかずゆき、南企画屋えぬ、FIC テキスタイル・スクール専門委員長、テキスタイル&カラー塾長など